

第五矢 都には（承前）

7

近衛大路に面した関白忠通の屋敷は妖しい香りがした。龍腦りゅうのうか何かだろう。

広賢は頼政と並び、家成の後ろに控えていた。

「まずは麿が殿下とお話しする。そち、たちは礼儀を弁わきまえぬところがあるゆえな。あの方に睨にらまれて、得することは何ひとつない。くれぐれも失礼のないようにの」

一昨日、十二月の十五夜、またもや鶴が猛威を振るった。

家成によると、忠通は伊勢平氏と賀茂氏を投入して鶴退治を試みたものの、惨敗した。全国から手配した野武士と唱聞師の一団を装わせ、自分はもちろん、平忠盛と賀茂憲栄の体面も傷つかぬように手当てしていた。平氏の武力であわわノ辻近辺に野次馬も寄せ付けず、骸も速やかに片付けたから、過去最大の三十三名が喰われたという噂の真偽も定かでなかった。

今朝がた忠通から遣いが来て、家成を屋敷へ呼んだ。日暮れの後、頼政と広賢を伴うようにとの指図さしずだったらしい。

三人が通されたのは、母屋の壁代かべしろで覆われた一角である。やがてゆらりと現れた忠通は、置き畳に堂々と坐した。

「関白殿下。従四位上・天文博士安倍広賢、並びに従五位下・無官源頼政を連れて、参上いたし

ました」

「ご苦勞、面おもてを上げよ」

相手は高位の公卿であり、広賢も間近に会うのは初めてだ。

下膨くふちれした白い顔は美男と言いくいが、大きな額に、迸ひびるような智謀を感じた。

忠通は二人の顔をじつと見てから、軽く頷いた。

「源頼政。そちは二度鶴に敗れ、深傷ふかでを負い、生死の境をさまよったそうじゃな」

貫祿のある口調と、全身が放つ覇氣と威迫は相当なものだ。

「いかにも。されど、殿下が邪魔をなさらねば、鶴を討ち取っておったはず。これほどの死者が
出ずに済みましたらう」

「控えんか、頼政！」

口を挟む家成を、忠通が「よい」と笏しやくで軽く制した。

「面白い男ではないか。安倍広賢、そちは鶴について相当調べたようじゃが？」

「殿下が鶴を政争の具になさる由を伺い、中納言様に禁じられておりますゆえ、細々と」

「控えい、広賢！」

「構わん。平安の世の政は行き詰まって久しい。じゃがそれは、公卿のみの責めではないぞ。誰しもが政を諦め、変えようとせぬゆえ、漫然と続いているのだ。政がさして変わらぬ時、民がまだしも幸せになる方法はひとつしかない。その時代の為政者の中で、一番ましな人間に政をさせることよ。つまり、磨とりゃ」

忠通は手中の笏で掌を軽く叩き、乾いた音を立てた。

「広賢の申す通り、磨は鶴を政に使うておつた。じゃが、磨としたことが、こたびは下手を打つてしもうてな。結果、わが平安京を最悪の異形が跋扈し、民を苦しめておる。されば、そちたちに退治を頼みたいのじゃ」

やはり、鶴が手に負えなくなったわけか。

「事情を伺わねば、倒せるものも倒せませぬ」

広賢が応じると、忠通が小さくうなずいた。

「あれは、呈子様が入内なさる月の十五夜であつた——」

当時、忠通が住んでいた撰閑家の東三条殿を、ひとりの陰陽師が前触れもなく訪れた。

どこの馬の骨とも知れぬ者に忠通が会うはずもない。だが、布留部と名乗る老人は、家人たちの前で奇つ怪な術を使って見せたといふので、会つてみる気になつた。

明るい月影が差し込む廂ノ間に、その男は静かに現れた。

白髪白髯の仙人のごとき風貌のくせに、不思議とどこか若々しさがあつた。

——やつがれは闇の陰陽道、サムハラの術を操ります。必ずやお役に立ちましょう。百聞は一見にしかず。ご覧くだされ。

布留部は懐から一匹の鼠を取り出すと、平然と板間に頭から叩きつけた。鼠はピクリと痙攣してから、動かなくなった。

「タカマガハラニ カムヅマリマス……」

手印を結んで呪じゆを唱えるうち、あちこちから黒い霧が集まってきて、小さな骸を覆つた。

「カレコノ ミヅノタカラトハ オキツカガミ ヘツカガミ……」

やがて、黒霧の中でヒョーヒョーと鳴き声がし、黒霧が消えると、死んだはずの鼠が、犬や狸と合わせたような奇妙な生き物になり、動き出した。

——それは、何じゃ？

——異形でございます。丁寧に育て上げれば百人、いや千人の武士にも匹敵いたしましょう。奇妙なそれは足掻くように蠢いていたが、やがて倒れ、動かなくなった。

——サムハラは冥界と現世を繋ぎ、無限の力を用いる無敵の術。やつがれと共に、この世を支配いたしませぬか。褒賞には、従一位陰陽頭を賜れば、結構。一上いちのかみの覇業を陰でお支えいたしましうぞ。

布留部は自らが史上最高の陰陽師だと、こともなげに言い放った。

——なぜ、曆に話を持ってきた？

——未来を見るに、摂関家の骨肉の争いで最後に勝利するのは、貴方様でございます。

——ほう。未来を見通せるとな。して、その術を何に使う？

——これより、やつがれの作り出す異形が、都を恐怖に陥れます。その異形はやつがれにしか始末できませぬ。されば、異形が他の者たちの力を奪い去りし後、貴方様が退治なされば、世を思いのまま動かせましょう。

——曆は、何をすればよい？

——異形は立派に育つまで少々ひ弱にございますれば、貴方様のお力でお守りください。いまひとつ。大内裏の中に、やつがれの住まいのご用意を。

布留部はいつの間にか萎んだ小さな異形の骨を、皺だらけの指で摘み上げて、忠通に示した。

——怪異騒ぎは、禁裏を派手に巻き込むが上策。されど、強力な邪気を使いますゆえ、入内な
さる呈子様と女官たちに然るべき術を施しておかねば、命を落とされかねませぬ。満月の夜が最
良なれば、この後、施術をお許し賜ればと。加えて新月の日に、呈子様の遣いとして、やつがれ
の指図を仰ぎに来る女官をお決めください。さすれば、異形が都を跋扈する間も、主従つつがな
くお過ごしになれましょう。

布留部は値踏みするように忠通を見た。

その含み笑いには、高位の公卿といえども、否を言えぬ恐ろしさがあつた——。

「むろん欲もあつたが、磨は何よりもその陰陽師を怖れた。もしも布留部が頼長に味方すれば、
磨の身が危ない。されば、ひとまず話に乗った上で、頼長を潰してから、始末するつもりじゃつ
た。ところが、奴のほうが先に磨を裏切りおつたわ」

「布留部の居場所は？」

広賢の問いに、忠通はかぶりを振った。

「武徳殿の下に住まわせて、望む物を届けさせておつたが、磨が鶴退治を命じた後、行方知れず
になった。布留部と異形からお守りするために帝を里内裏へお移しましたが、最近またお加減が優
れぬようだな」

「布留部の狙いは、何じゃと思われませんか？」

頼政の問いに、忠通は厳しい顔つきになった。

「布留部は今や、最強の異形を自在に操れる。鶴は帝のご不調とも関わりがあるはず。恐らくは

帝のお命を手中に握り、鵺の力でこの世に君臨することであろう。鵺はますます強大かつ兇暴になっておる。布留部は異形の完成まで二年かかると言うておった」

来年の四月で、鵺の出現からちょうど丸二年だ。

「殿下、中宮呈子様に仕える侍女に、螢火という者はおりませぬか？」

「これ、頼政」

家成がたしなめるが、頼政は必死の面持ちだ。

「呈子様によく仕えてくれる侍女でな。月に一度の遣いを務めておった。じゃが、先月であったか、里内裏から行方知れずとなった」

「何、と……」

頼政は雷を喰らったような顔つきだ。布留部の失踪とも関わりがありそうだ。

「鵺は毎月現れるようになった。次は一月の十五夜やも知れん。倒せるか？」

「はっ。螢火を助け出すためにも、一刻も早く——」

頼政を遮りながら、広賢が応じた。

「サムハラは生死を超越する術なれば、異形の完成とはすなわち不死身の意。つまり次こそ、人間が鵺を倒せる最後の機会でごさる。しからば、鵺の謎を解き明かした上で、必ず勝たねばなりません。身どもに三月、^{みつき}くださりませ」

「されば決戦は、^{やよい}弥生三月か」

「御意。それまで、十五夜の丑ノ刻は身分を問わず、あわわノ辻はもちろん、平安京における夜歩きを厳に禁じられませ」

「心得た。家成よ、愚弟とはやり合うておるでな。院から父上にお話しいただくのがよいか？」

「それが最善かと。磨からも、院にお願い申し上げておきまする」

これからは鶴との戦いで政敵同士が足を引っ張り合わぬよう、院から指図を賜るわけだ。

「鶴はふだん人間の姿をしておるはず。無礼を承知で申し上げます。皇子様以下、禁裏より移られし女官たちの血の色をお確かめくださいませ。もしも青であれば——」

「控えい、広賢！ 恐れ多くも——」

忠通の笏が、家成を遮った。

「工夫いたそう。鶴退治が磨の手柄となれば、頼長めが邪魔をしてこよう。あの賢い馬鹿は他愛もないが、父上が厄介じゃ。されば帝より、そちたちへ直々に鶴退治の勅命を賜る」

考えうる最大の荣誉だ。家成も、頼政も驚きを隠せぬ様子だった。

「畏れながら、宗明流安倍家はご辞退申し上げます」

場の三人が一斉に広賢を見た。

「帝が安倍三家のひとつに肩入れなされば、他流派及び賀茂家が妨害を仕掛けて参るは必定。そもそもこたびの一件は安倍家の不祥事。火を消すは当然の仕儀にて、恩賞を賜る筋合いはございませぬ」

忠通が満足そうにうなずいた。

「時代はよき陰陽師を持った。されば源頼政、そちに対し、追って勅命を賜る。二度無惨に敗れしそちには、世間の同情も集まっておる。落ちぶれた摂津源氏の手柄なら、政争に影響もあるまい。邪魔は入りにくかろう。加えて——」

忠通が手を叩くと、黒天狗の仮面を着けた黒装束の長身が廂ノ間から現れた。

「その者が鶴退治の力となろう。剣技も一流でな。磨の覇権を裏で支えてきた懐刀じゃ」

「どの面^{つら}下げて、わしの前に来た！」

頼政が憤怒の形相で怒号を發した。

「お前のために、大勢死んだんじゃぞ！ 何とか言うてみい」

「こやつは幼き日に地獄を見たようでな。耳は聞こえるが、しゃべれぬ」

頼政は沈黙し、今度はジロリと忠通を見た。

「磨の手足として動いた身。憎むなら磨を憎んでくれい。いま一つ、詫びておきたい。あれを」

黒天狗が廂ノ間へ退き、弓矢を手に戻ってきた。

「そちの家宝を預かっておった。赦せ」

頼政は憤懣^{ふんまん}やるかたない様子で、高位の公卿を睨みつけている。

「人間が異形を倒すためだ。恩讐を超えて力を合わせるべし」

広賢は頼政のたくましい肩へ手を置いて、なだめた。

「異形の跋扈は磨の責めじゃ。これ以上、鶴に都を蹂躪させるわけにはいかぬ。この通りじゃ」

忠通が頭を下げると、家成が驚き、「どうぞ面を」と慌てた。

「畏まった。されど、わしが命を懸けるのは、殿下のためではござらん」

「黒天狗には布留部を捜させている。見つけ次第討ち取るであろうが、容易ではあるまい」

「いや、生け捕りとなされませ」

怪訝そうに見る忠通に、広賢は続けた。

「布留部もまた、自ら創り出した異形が手に負えぬのやも知れませぬ。その際は、鶴について問わねばなりませぬゆえ」

忠通が布留部に鶴退治を命じてから、三カ月が経つ。武徳殿の地下はもぬけの殻だった。すでに布留部が鶴に喰われた可能性さえある。

「黒天狗よ。蛍火を無事に捜し出したら、お前を赦してやる」

頼政に向かい、黒天狗は両手を突いて頭を下げた。

8

頼政は昼下がりの堀川小路を、北へ一散に駆けた。後ろに隼太が続く。

広賢から急な報せが入った。

布留部が一条戻橋いちじょうへいしほの屋敷に現れたのである。関白に命を狙われており、匿かくってほしいと頼ってきたという。蛍火の居場所も知っているのではないか。

「頼政じゃ、入るぞ！」

急ぎ出てきた由良に案内されて東ノ対へ入ると、広賢と泰親が話し込んでいた。布留部は西ノ対に待たせてあるという。

「事と次第によっては斬る。頼政、頼むぞ」

声を落とす泰親に、頼政はこくりと頷き返した。死穢しじなど怖れている場合ではない。

「仕損ぜぬよう、隼太も後ろに控えさせる」

「サムハラサムハラの術を使われたら厄介だ。奴が手で印を結んだ時は、迷わず斬れ」

泰親は腕の立つ武士を雇い、この屋敷に向かわせているという。

「布留部が鶴になったりはせんじやろか」

へんげ

「変化する前に、必ず斬れ」

「落ち着け、ご兩人。月の満ち欠けとの関わりはまだ見えぬが、十五夜にしか鶴になれぬはずだ」
興奮する二人をなだめながら、広賢が割って入ってきた。

「身どもの見立てに狂いが必要ならば、やはり布留部に大した力はなさそうだ。油断はできぬが、斬れば手掛かりを失うことを忘れるな。それにどうも様子が変なのだ。とにかく鶴について聞き出すことが先決だ。参るぞ」

広賢を先頭に西ノ対へ入るなり、頼政は丹田に冷気を感じた。

鶴と遭遇した時の冷たさと同じだ。

痩せた小柄な老人は座ったまま、うたた寝をしていた。仙人を思わせる風貌で、左手には鞆ゆがけのような革手袋を着けていた。

武徳殿の地下迷宮のように、術を施されてからでは遅い。

(今なら、確実に討てそうなんじゃが……)

広賢が泰親と並び、布留部に向かい合って座った。

頼政は陰陽師たちと三角を作るように座り、太刀を手の届く左脇へ置いた。隼太と由良がそれぞれの主の斜め後ろに控える。

張り詰める緊張のなか、人の気配で布留部が目覚ました。

あくびをしながら両手を天井に上げ、伸びをしている。

「齢を食うと、二六時中眠うなるんじゃないや。おお、泰親まで参ったか。安倍家三流派の揃い踏みは、何年ぶりかのう」

しやがれ声は、ありきたりな老人の声だった。

広賢は頼政を短く紹介してから、代表して切り出した。

「そなたは京を出てから今まで、どこで何をしていた？」

「すべての始まりは、これよ」

周りの視線に促されるように、布留部は革手袋を留める赤紐を外してゆく。

露わになった手首から先は、禍々しい真紫に変色している。

頼政はちらりと太刀へ目をやった。

「都を逐おわれて、鎮西ちんせいへ流れて間もなく、この左手がだんだん冷とうなつてのう。ある日、サム

ハラハの術が使えることに気づいた」

試しに左手で印を結んで咒を唱えると、未来が見え、術を施せるようになったという。

「使えるのは夜だけでな。おまけに、物忘れがひどうなつた。会った相手くらいはわかるが、他はうろ覚えなんじゃ。五年ほど前、左手が示す通りに宋へ渡つた。なぜか知れんが、獣の骨を集めとうなつてな。大きな猛虎の骨やらを手に入れた頃から、記憶が途切れとる。なぜ京へ上つたのかも覚えとらん。気がついたら、雲の上の公卿に使われとつた。最初は薄紫じゃつたが、左手の紫色もどんどん濃うなつて、今ではこんな有様よ」

布留部はそつと左手に革手袋を嵌め直した。

「都では、何をしていたのだ？」

「どこかの気味悪い地下の部屋に住んどった。どうしても出られんで、気が変になりそうじゃったわい。近ごろは己が己でない気がするんじゃ」

ひと月ほど記憶が飛ぶことさえあるという。にわかには信じられぬが、武徳殿の地下に張られていた結界を、広賢と泰親が解いたために出られたのか。

「それで、今日はいつたい、いつなんじゃ？」

情けない顔だ。卑屈な笑みは、鶴を自在に操る闇の大陰陽師にはとても見えなかった。

「暮れも近づくと、仁平元年十二月二十日だ」

老人が頭を抱えた。白髪が哀れを誘う。

「まともな記憶が一年ほど飛んどるわい。禁断の術を使い過ぎた報いやも知れん。サムハラの話がわかるのはそなただけ。されば昔の誼よじみを頼って、なりふり構わずやってきたんじゃ」

「鶴はそなたが作ったのか？」

泰親の刺すような問いに、布留部は首を傾げた。

「わからん。夢うつつで何かをやつとるが、ほとんど何も覚えとらんじゃ」

「螢火を知つとるな？」

口を挟む頼政を、布留部が怪訝そうに見た。

「中宮呈子様に仕える女官じゃ。武徳殿で会おうとつたであろう」

「そうやも知れん。じゃが己が何を話して、何をしとるのか、ぼんやりとしかわからんじゃ」

「とぼけるな、爺おじい！」

激昂する頼政を、広賢が制した。

「サムハラの術は魂を扱う。何者かに魂を乗っ取られかけているのだろう」

巫女が神がかかるように、人間に霊が憑依ひょういすることはある。過半は演技で、紛い物のほうが多いがと、泰親が付け足した。

「わしはこれから、どうなるんじやる……」

老人は消え入りそうな声だ。

「左手の件で、何か心当たりはないのか？」

「実はの」と、布留部は言いにくそうに続けた。

「都を出る前、崇道神社すどうに参詣した。わしにサムハラの術を授けてくだされと祈願したんじや」

「よりによって、あの神社か」

吐き捨てる広賢はいつもの仏頂面だが、泰親の顔面が蒼白になった。

崇道神社は早良親王さわらを鎮めるために創建された社だ。もしや最悪の怨霊が復讐のために平安京を滅ぼそうとしているのか。

「早良親王がわしに乗り移ってしもうたんじや！ 頼む、そなたたちの術で助けてくれい！」

「あの最凶の怨霊が鶴を操っておるとすれば、すこぶる厄介な話だが、安倍本家として悪霊を祓う儀式をしてやってもよい。三日三晩かかるがな」

「ありがたや」

布留部は泰親に手を合わせ、縋り付かんばかりだ。

「いや、怨霊は祓えても、表の陰陽道でサムハラの術が解けるとは思えぬな」

広賢の低音に、布留部は泣きそうな顔になった。

「そなたを助けてやれるか、助けるべきかはわからぬが、二十七年前に何があったのか、真実を話してくれぬか。何か手掛かりが得られるやも知れぬ」

布留部は小さく頷くと、視線を板ノ間に落として語り始めた――。

9

「あの頃、わしはまだ兼時かねときと名乗っておった。三家はうまく行つとつたんじや。悪いのは政文まことよ。いや、サムハラに憑りつかれた晴仁やも知れんがな……」

広賢の傍らで、泰親も布留部を睨んでいる。

当時、晴仁は安倍三家に伝わるとくさのかんだから〈十種神宝〉の謎を解き明かしたいと言い、政文と兼時も協力して、三家に伝わる祭具を陰陽寮の半地下の一室に集めていた。

「部屋には、見慣れぬ石やら人骨、獣の骸、不気味なものばかり集めておったわ」

晴仁は死者復活の秘法をひたすら試していたに違いない。

「あの日、政文に誘われて、わしは土産の酒を手に、晴仁の部屋を訪れた。今は狼を調べとると言うて、奥には骨やら毛皮やらが転がつとつた。相変わらず気味の悪い部屋でう」

広賢、泰親ら弟たちの嫁を誰にするかなどと、他愛もない話をしながら酒を酌み交わすうち、兼時は体が痺れてくるのに気付いた。

――薬を盛ったのか、政文？

苦しげな晴仁の問いに、政文が薄笑みを浮かべた。

――そなたの才を認めるがゆえだ。放っておけば、本家もいずれ宗明流に呑み込まれかねん。

——共に、表裏の陰陽道を極めようと誓ったではないか。

痺れで回らぬ舌で問う晴仁を、政文は嗤った。

——そなたの前では、あらゆる陰陽師が霞む。どれほど私がそなたの才を羨み、畏れ、嫉んできたことか。天才には、凡人の気持ちなど永劫わからぬわ。

——私はまだ、死ぬわけにはいかぬ。

晴仁は震える左手で印を結んだ。

〜 タカマガハラニ カムヅマリマス

——十種祓詞か。だが、サムハラはらの術はまだ完成しておらぬはずだ。当家の神宝はすべて偽物を渡したゆえな。

〜 スメカミタチノ イアラハシタマフ……

かまわず唱え続ける晴仁をしり目に、政文は怯える兼時をちらりと見た。

——そなたごとき取るに足りぬが、この際、安倍を再び一つにまとめたい。賀茂に勝つためだ。政文は立ち上がり、動けぬ二人を見下ろした。

——三人で杯を重ねるうち、晴仁がサムハラはらの術で穢れた異形を生み出した。二人は無惨に殺され、私は這う這うほの体で逃げた、という筋書きだ。嘘も百度繰り返せば、真になる。愚かな都人には、真実を見抜く力などないからな。

〜 カクナシテハ マカリシヒトモ イキカエラム

奥の部屋で、何やらカタカタ音がし、部屋の中に黒い霧が漂い始めた。

——何だ、この霧は？

焦った政文が部屋の遣戸やりどを開けると、廊下から武士が四人、抜刀しながら入ってきた。

——者ども、この二人は動けぬ。派手に殺せ。

武士たちは晴仁に切りつけ、赤い血潮が飛んだ。

だが、すぐに晴仁の身は漆黒の霧で覆われた。

武士たちは怯み、あれよあれよという間に、部屋は闇に覆われた。

ゝ ワザワイ マタモロモロノ ヤマイヲモ……

闇の中で、とぎれとぎれの咒が続く。

ゝ カシコミカシコミ モウス

瀕死の晴仁がかすれ声で唱え終えた時、半地下の明かり取り窓から、十五夜の月影が差し込んできた。

晴仁の苦しげな声が止んだ。

代わりにヒョーヒョーと虎とらの鳴くような声がし、野獣の唸りが聞こえ始めた。

たちまち、暗がりの中で悲鳴が上がった——。

「わしは長い間、痺れと恐怖で動けんかった。ずいぶん経って霧が晴れた時には、部屋の真ん中で、青い狼が倒れておった」

狼の周りには、噛み殺された政文と武士たちの骸が転がっていた。晴仁の姿は、ない。

「わしは晴仁が狼になったんじゃないと思うた。体に傷はなかったが、狼は口から青い血を吐いて、死んでしもうた」

広賢は唇を噛んだ。覚悟はしていたが、やはり兄は死んだのだ。

「大内裏で起こった事件で、これほどの穢れも少なからう。当時の検非違使^{けびいし}、平忠盛殿は怪異として片付け、口外を禁じたんじや」

「狼の骸はどうしたのだ？」

「人目に付かぬように、平氏の者たちが秘かに穴を掘って埋めた。陰陽寮の西の裏手じや。わたしも立ち会った」

「それから三年後、陰陽寮が焼けた時に、異形が現れた話を知っているか？」

広賢は布留部に問いながら、頼政をちらりと見た。

やはり顔色が変わっている。

「わしは知らぬ。あの部屋は穢れゆえに封印されておったはずじや。一度だけ中を覗いたが、部屋の奥が真っ黒な霧に覆われとった。怖いゆえ、そのままにしておいたがの」

すでに布留部は都を逐われていたから、さらに九年後、保延二年^{ほうえん}（一一三六）に現れた異形とは関わりがあるまい。この老人が知っているのは、ここまでか。

「これから、そなたはどうするつもりだ？」

広賢の問いに、布留部がにじり寄ってきた。老人の臭いがする。

「匿って欲しいんじや。また夜が来れば、わしがわしでなくなる。頼む、助けてくれい」

手を合わせて拝む老人の姿は哀れだが、広賢には手袋の左手が恐ろしかった。

晴仁が恐らく狼^{へんげ}に変化したように、この老人が鶴^{へんげ}となるのなら、変化を始めた時、すかさず斬る。それで、鶴退治は終わりだ。

「助けるには条件がある。そなたの流派に伝わる十種神宝について話せ。沖津鏡おきつかがみと辺津鏡へつかがみ、生玉いくたまと死まかるがえしのたま返玉たまの四つだ」

「その四神宝は形に残せぬというのが、自家の口伝くでんじゃった。死返玉とか、大事そうな神宝を傍流が受け継ぐのも変じゃし、真偽は知らんがの」

広賢と泰親がじろりと睨むと、布留部は慌てた。

「本当じゃ。晴仁は信じてくれたぞ。……いかん、また眠うなってきた。泰親、早う早良親王の怨霊を祓ってくれい」

「今さら慌てても始まるまい。相当な数の陰陽師を揃えて、面倒な手順を踏まねばならん」
「たの、む……」

布留部は突然の睡魔に襲われた様子で、その場で横になるや、たちまちこひき鼾を掻き始めた。
衾ふすまをかけてやる由良を横目で見ながら、広賢は立ち上がった。

「隼太と由良は、ここで布留部を見張ってくれ。今後いかにすべきか、三人で談合したい」
無言で廊下を渡り、東ノ対に入ると、三人で小さな三角を作った。

「解せぬことばかりだ。布留部は信じられん。斬るべし」

泰親が冷淡に言い放った。

「奴が嘘を吐き、何かを隠しているなら、むしろ死なせてはなるまい。鶴退治の手掛かりを失うわけにはいかぬ」

関白に突き出せば、裏切り者として消されかねなかった。

「わしには嘘と思えなんだ。早良親王に操られとるんなら、あの爺さんに罪はなからう」

三人は自然、額を寄せ合い、声を落としている。

「頼政は甘い。鶴退治を阻むために、広賢を殺しに来たのではないか」

泰親の言にも一理あった。あの左手が怖い。命を奪うほうが安全か。

「布留部を始末する前に、頼政に確かめたいことがある。大治二年に陰陽寮が燃えた時、そなたは半地下の一室で異形に遭った。違うか？」

だしぬけに広賢が切り出すと、頼政はギョツと口を噤んだ。わかりやすい男だ。

「そなたのことゆえ、口外せぬと約したか、誰ぞを庇うためであろうが、事態は差し迫っておる。仔細を話してくれぬか」

それでもへの字に口を閉ざす頼政の背に、泰親が手をやった。

「陰陽師はしかるべき依頼があれば、呪詛さえやる生業だ。秘密は必ず守る。鶴の謎を解き明かすためだ」

頼政は腕組みをして考え込んだが、二人に見つめられて、やがて小さく頷いた。

「名は明かせぬが、さる公卿の姫御で、禁裏に仕える女官がおった。宮中でお祓いをしてくれた若い陰陽師と恋に落ちたそうな」

ある日、その女官が神隠しに遭った。

蔵人頭くらんごうから頼政の父に命が下り、父子で搜索を始めたものの、行方は知れない。そして失踪から半月後、陰陽寮の端役人が臓腑を喰われた骸で見つかった。

「例の開かずの部屋が怪しいという話になったんじや」

怪異の噂があり、誰も寄り付かないのを奇貨として、件くだんの陰陽師はその部屋で女官と情を交

わしていたらしい。

「そこに奴はいた。顔が猿で、体が犬の小さな異形じやった。幸い討ち果たせたが、わしらは後始末に困って、蔵人頭の指図を仰いだ」

蔵人頭が陰陽頭の賀茂憲栄に諮ったところ、禍々しき怨霊を祓うために炎を使うことになった。炎は正邪関わりなく焼き尽くす。手掛かりも失われ、灰しか残らない。

出火の仔細は、むろん極秘とされた。

「時の蔵人頭は藤原忠宗卿。如才ない才人だ。公卿たちの恐怖を考えれば、妥当な決断だったやも知れぬ」

泰親が納得したように頷いている。

「頼政、いま一つ聞かせよ。十五年前、そなたが蔵人を辞めた一件にも、異形が絡んでいたのではないか？」

広賢が切り出すと、頼政はむすつとした顔で再び沈黙した。

「ちょうど九月の春日若宮祭のため、陰陽師たちが禁裏を出払っていた頃だ」

頼政の様子を窺いながら、広賢は続ける。

「時が悪すぎた。禁裏に異形が現れ、人が喰い殺されたとあらば、不吉と穢れのために、鳴り物入りの新祭がぶち壊しになる。そなたは、時の蔵人頭から、天朝への忠義のためと言い含められた。ゆえに秘密と共に、自ら身を引いたのではないか？」

広賢は頼政の逞しい肩にそつと手を置いた。

「事情を何も知らぬ帝も、中納言様も、たった二カ月で蔵人を辞したそなたに、面目を潰された

と憤ったであろうな。それがこの不遇の十五年余だ。違うか？」

ずいぶん遅れて、答えがぼそりと返ってきた。

「わしが泥を被れば、万事うまく回ると思うたんじゃ」

「その時の様子を詳しく話してくれ」

頼政は目をつぶり、また少し考えてから話し始めた。

「あの夜、わしは宿直とのいとして、蔵人所に詰めておった。異形が出たと聞いて、わしはすぐに雷鳴壺へ駆けつけたんじゃ」

深夜の人氣ひとびのない舎殿の裏手には、黒い霧をまとった狼がおり、女官の臍腑を喰らっていた。

頼政は飛び掛かってきた狼と取っ組み合いの末、全身傷だらけになりながら、愛刀で異形の首を斬り落とした。

翌早暁、仔細を聞いた若い蔵人頭は、大いに驚いた。

この件が明るみになれば、国家の重要事である春日若宮祭は台無しだ。ゆえに虚偽を報告するしかないが、それは天朝への非違であるから、責めを負って職を辞するほかない。頼政は命令に従った。蔵人頭も二カ月後に職を辞し、事件は闇に葬られた。

「いかにも頼政のやりそうな真似だ」

泰親が呆れつつ感服している。

「その時も誰か、神隠しに遭わなかったか？」

頼政がひどく悲しげな顔つきになった。

「中宮にお仕えしていた深山木みやまぎという女官じゃ。わしと恋仲じゃったが、異形が現れる前日の夕

刻、中務省の中宮職に所用で出向いた後、行方知れずになった」

中宮職は后妃の世話をする役所であり、後宮の女官たちもしばしば出入りした。

「頼政はまさしく異形に魅入れし男よな。かの源頼光以来、摂津源氏は異形退治を宿命付けられたのであろう。歴史にはたまにある不思議だ」

泰親が奇妙に感心しているが、広賢の関心はそこにはない。

今度は広賢が、胸に架けた神宝を手でまさぐりながら、長考に入った。

禁裏に異形が現れたのは、天治元年（一一二四）、大治二年（一一二七）と保延二年（一一三六）の三回、そして今回の鵺だ。

四体の異形に共通する点は何か。

いつ、いかなる条件が揃った時に、誰が出現させたのか。

獣骨、神隠し、怨、そして十五夜の月……。

どれくらい時が経ったのか、二人の視線を感じて、広賢はわれに返った。

「わずかだが、見えて参った」

頼政と泰親が身を乗り出してくる。

「安倍三流派の談合で青き狼が現れたのは、満月の夜だ。若宮祭は十七日で、挙行前日の朝に異形の骸が見つかった。ゆえに頼政が異形を斬ったのも、深山木が神隠しに遭ったのも十五夜だ。陰陽寮の火事の件では、女官は前月に消えたが、それも十五夜だったはずだ」

「焼失前の陰陽寮の半地下には、月影が入った。四体の異形に共通するのは、十五夜の月というわけか」

泰親の念押しに、広賢が頷く。

「身どもはかねて神隠しが気に懸かっていた。今回はまだわからぬが、以前の三体の出現に際しては、人が消えている」

晴仁、陰陽師と恋をしていた女官、そして深山木だ。

「世に神隠しは珍しくないが、異形の出現に関わりがあるとなれば、話は別だ。サムハラよりしろの術で生身の人間を依代よりしろに使って、異形へんげに変化させたとも考えられる」

「晴仁殿も、か」

恐らく、致命傷を負わされた晴仁は生き延びようとして、自らにサムハラよりしろの術を施して異形と化した。それは一応成功したが、十種神宝も術も不完全であったために、生き続けられなかったのではないか。

「他は誰がやったのだ？ 誰にそんな真似ができた？」

やはり布留部か。あるいは、早良親王の怨霊なのか。

「わしが斬った異形は……深山木であったと申すのか？」

泣きそうな顔の頼政の広い背を、泰親が撫でてやっている。

「サムハラとは、業深き術よな」

「螢火が消えてしもうたが、まさか依代にされたのではあるまいな、博士？」

「わからん。その女が消える前から、鶴は現れていた。だが、鶴は何体でも創れるはずだ」

「鶴が、一体ではないと申すのか？」

頼政と泰親が同時に問うた時、にわかには廊下が慌ただしくなった。

「一大事でござる！ 布留部がおりませぬ！」

隼太と由良が廊下を駆けてきた。

三人は急いで西ノ対へ向かう。誰もいない部屋には、老人の臭いが残っているだけだった。

「何があった？」

広賢が問うと、由良が申し訳なきように、頭を下げた。

「気づいたら眠り込んでしまつて、起きたら、褥しとねがもぬけの殻だったんです」

泰親が忌々しげに舌打ちをした。

「言わぬことではない。やはり殺しておくべきだったのだ」

「まだ遠くへは行つとらんはずじゃ。追うぞ、隼太！」

駆け出した頼政の背に、泰親の声が飛んだ。

「待て、頼政！ 布留部が土産を残していきおつた。この屋敷にあの厄介な結界が張られている」

反閉へんぱいで術を解くのに、四半刻は掛かりそうだ。

布留部はどこへ向かったのか。

サムハラサムハラの術を駆使する陰陽師を簡単に見つけ出せるとは思えなかった。

冬の長い夜が、京に忍び寄っていた。

10

頼政たちは夜の武徳殿界限を捜したが、結果も張られておらず、布留部の姿はなかった。

「雪じゃな。こいつは、積もるやも知れんぞ」

先を行く隼太が崇道神社の境内に入り、参道の敷石を松明で照らしてゆく。

深更近く、小野ノ里にある鎮守の森は、邪気で満ちていた。

鳥居をくぐる時、頼政は丹田に冷気を感じた。

「御子は何か、感じるか？」

「当たり前だ。眉間に痺れがある。鵠が棲んでおっても驚かぬな」

「早良親王の怨霊が布留部に乗り移って鵠を操つとるんなら、やっぱり平安京を滅ぼす気じゃろうか？」

「怨みを抱いて死ぬ人間など、世に掃いて捨てるほどいる」

ずっと黙っていた広賢が低音で口を挟んできた。早良親王の怨霊を信じようとする人間は、京で広賢くらいではないか。

「ここの神主も食えぬ爺さんでな。油断はできん」

泰親から事情を話し、老神主に真夜中の境内を案内してもらったが、布留部らしき姿は見当たらなかった。

さらに五人で一刻ほど捜した後、一行は神楽殿に入った。

「二人は戸口で外の様子に気を配ってくれ。あの爺さんは欲で動く。布留部の味方やも知れん」

高燈台が照らす薄暗い部屋には、火桶が幾つか置かれていた。

中央のひとつを三人で囲む。

「広い平安京から奴を見つけ出すのは骨だな。明日にも私から左府様に願い出て、検非違使にも捜させるが、望み薄だろう」

「われらは正面から戦って、鶴を倒すほかあるまい。わしの考えを聞いてくれんか」

一度目は弓矢で、二度目は太刀で戦い、敗れた。三度目はどうするか。

「聞こう」

広賢は細長い五本の指を伸ばし、苦み走った顔の前で合わせると、瞼を閉じた。

「あの黒雲がある限り、大勢で戦えば同士討ちになりかねん。されば、わしは二度目の戦い方がよいと思うておる。戦うのは、辻の中心にいる武士と陰陽師じゃ。前後から同時に攻めねば鶴は倒せぬ。しからば、大蛇は隼太と由良に任せて、正面からわしと博士が挑む。じゃが、あの虎爪に、今のままで勝つのは難しい。左右から四本刀が襲ってきおるゆえな」

「もう一人、武士を加えるか？」

泰親が口を挟んだが、頼政はかぶりを振った。

「あの暗がりで戦うのに、半端な武人はかえって足手まといじゃ」

命知らずの荒武者たちは鶴にずいぶん殺された。身分の高い武士は失うものが多すぎて、加わるまい。鶴との戦いには、慣れも必要だ。

「大きゅうなつた鶴と戦うのに、太刀では分が悪い。さればわしは、鶴を討つために新しい武器を作る。両頭刃の大薙刀よ」

長い薙刀の両端に刃を付けて、左右からの攻撃に対応する。慣れるために少し時は要るが、鍛錬さえすれば、使いこなせよう。

「わが愛刀、深山木を打った刀鍛冶を訪ねて、奥出雲おくいずものたたらへ参る。どうじゃな、博士？」

「武芸については任せる。身どもはそなたが鶴を討てるよう、手助けするのみだ」

広賢が眼を開けて、頼政を見た。

「視界を奪われる黒雲の中で、ますます兇暴となった異形と戦うのは難事だ。だが、鶴は月影を浴びるために必ず黒雲を出る。そこを矢で狙え」

「じゃが、あの黒雲の中では狙いようがあるまい」

「そなたは馬に乗れるな？」

「当たり前じゃ。わが愛馬、白竜はくりゆうはいま所領にしわきの西脇におるが——」

「黒雲の大きさには限りがある。そなたは馬を駆って、黒雲の外から鶴を狙うのだ」

「なるほど。うまくやれば、明るい場所で鶴を狙えるわけか」

「鶴は人間を喰うために地上へ降り立つ。これまであわわノ辻が戦場になったのは、そこに人間が待ち構えていたからだ。四ツ辻では四方にしか行けぬが、こたびは鶴を倒すための戦いの場をこちらで作りたい」

広賢は絵地図を広げた。

「鶴は常に高い場所にいるために、人間は不利だった。されば、こちらも高みに登る。身どもが思案した格好の戦場は、ここだ」

細長い指が示す先を見て、頼政と泰親は同時に声を上げた。

紫宸殿ししんでんの南に広がる大きな庭だ。清涼殿にも近く、まさしく禁裏の中心ともいえる。

「正気か、広賢？ 最もやんごとなき場所だぞ」

泰親の呆れ顔に、広賢が何もない顔で頷く。

「周りには高い建物が多いゆえ、射手を自在に配置できる」

「建物に入れば、戦い方も変えられる。妙案かも知れぬな」

「待たぬか、二人とも。馬を走らせ、屋根に上り、禁裏を血で穢すなど、公卿たちがとうてい黙っておらぬ」

「その説得は、われらの仕事ではない。異形はすでに禁裏を何度も侵した。それに帝は今、里内裏におわす。身どもは関白殿下と中納言様に話をつける。そなたは悪左府が足を引っ張らぬようにせよ」

「ああ見えて、左府様は公卿連中の意向を気になさる。公卿は自派の……」

「決戦の日まで、わしも改めて武芸を徹底的に磨き上げるぞ」

「馬上での弓術も頼む。暗闇でも存分に戦えるようにな」

「簡単に申すがな。相手は保身しか頭にない公卿だぞ」

「さて、次は陰陽師の仕事だ」

愚痴を無視して、広賢が泰親に向き直った。

「身どもの見立てでは、鶴は十種神宝を使って、サムハラの術により生み出された異形だ。ゆえに、神宝の謎を解けば、退治に近づく。宗明流に伝わる三宝は前回と同じだ。品々物之比くさくさのもの礼は戦

場の枢要の場所に置き、身どもと由良は道返玉みちがえしのたまと足玉たるたまで術を施す。布留部によれば、鏡と玉の二対は形にできず、伝わっていない」

「奴は信じられん。玉と鏡は古来、最も強い霊力を持つ祭具だ」

「知っている。その四宝の謎も解かねばならぬが、安倍本家に伝わる三宝はどうか」

泰親は首を傾げた。

「私はサムハラに関心がなかったゆえ、神宝の力も疑っていた。悪霊を祓う八握剣は数代前に撰関家へ献上済みだ。左府様から拝借できぬでもなかるうが——」

「手配してくれ。蛇比礼は？」

おうちのひれ

「そなたに言われて蔵を調べさせたが、それらしきものがまだ見つからぬ。蜂比礼は薄汚れた箱に干からびた実があつたきりだ」

はちのひれ

広賢は巾着袋から紫色の実をひとつ摘み出した。干した野苺か。

「こんな実ではなかったか？」

「よう似ておるな」

「身どもの作った菓子だ。ひと粒、食べてみてくれ」

広賢は毒見するように自分の口へ入れると、巾着袋を手渡してきた。

「おお、気が利くのう。ちょうど小腹が空いたところじゃ」

頼政にはチンプンカンプンの話が続き、退屈していた。

「よく噛んで、しっかりと味わってくれ。ひと粒だけだ」

巾着袋から転がり落ちてきた実を、さっそく口の中へ放り込む。

「かような時に、菓子か？」

泰親がいぶかしげな顔で後に続く。

噛んで味わおうとして、頼政は覚えぬ顔をしかめた。

口の中が痺れる。隣の泰親も渋面だ。そういえば、螢火がくれた犬枇杷もこんな味だった。

「何じゃな、これは。……ひどい味じゃ」

広賢は平然とした顔で、口を動かしながら応じる。

「だんだん慣れる。犬枇杷の実は、河内国や大宰府から宮中へ献上され、帝を通じて神に捧げられる。『古事記』に記された不老不死の実、ときじくのかくのこみ たちばな非時香菓は橘の実とされるが、本来は犬枇杷だったのやも知れぬ」

「こんなに不味いものをか？」

「いや、献上される雌株と違って、雄株には小さな蜂が数え切れぬほど詰まっている。十種神宝のひとつ、蜂比礼はちのひれは魔除けの布とも伝わるが、それは身を包む布が霊力を持つからだ。だが、本当の蜂比礼は、蜂の霊力を持つ凝縮したこの干菓子ひがしだ」

「わしらは蜂を喰ったんか？ こんなものを、菓子と呼んでくれい」

もう呑み込んでしまったが、頼政は吐き出したくなった。

「呼び方はこだわらぬが、これはただの実ではない。犬枇杷の雄株を、鶴ノ森の強い邪気の中で陰干ししたものだ。日に一粒、体に取り込め。十日ごとに一粒ずつ増やしてゆくのだ」

「怨の毒に心身を慣れさせるわけだな」

苦笑する泰親は、まだ呑み込めないようだ。

「もしや、螢火も邪気に慣れるために食べていたわけか。」

「黒雲の中で少しでも長く戦うためだ。これで、蛇毒にもある程度耐えられよう。私と由良は日に三粒食べられるようになった。前回より長く術を使えるはずだ」

「本当じゃ。もう体がだるうなってきたわい」

「効いている証拠だ。明日届けさせる」

なるほど、広賢が鶴との決戦まで三カ月を見込んだ理由がわかってきた。

「体に悪そうだな」

泰親は口に手を当てて、苦い顔をしている。

「たぶんな。作った数も少ないゆえ、食するのはわれらだけでよい」

鶴と戦える気がしてきた。だが――。

「博士、奴は深い傷を喰らっても、すぐに治してしまいおる。あれを何とかできんのか？」

鶴の強さは、その驚異の回復力にあった。

「怨こそが、鶴の力の源だ。あの黒雲がある限り、勝利は遠い。されば、あらゆる手立てを講じて、怨を戦場から薄め、消すしかない。表の陰陽師にもできることがある」

広賢が見ると、泰親が頷いた。

「実は関白から話があつたらしく、賀茂家が協力を申し出てきた。来る戦場では、安倍、賀茂両家をあげて、光明真言で怨を祓ってやる。多少の役には立とう」

「平氏を動かすよう、身どもから関白に願い出るが、泰親は悪左府を通じて河内源氏を動かせ。

南庭を囲む建物に弓手を用意するのだ。黒雲さえ晴らせれば、遠矢も効くはず。中心の四人は鶴に集中するゆえ、他のすべての采配はそなたに任せる。ゆえに邪気に当たらぬよう、蜂比礼を食うのだ」

やっと呑み込んだらしい泰親が、重々しく頷く。

武士と陰陽師による総力戦か。

「だが、光明真言だけでは足りぬ。先月、身どもは鶴ノ森に黒雲が湧く謎を解いた」

広賢が絵地図にある朱色の五点を順に示してゆく。

「北は賀茂別雷^{かもわけいかづち}神社、東は法勝寺、西は広隆寺、南西は西寺、南東は綜芸種智院。そのいずれにも紫水晶があった」

「五芒星の石陣で、都にある邪気という邪気を集めるわけか」

泰親が食い入るように見た。

平安京全体がすっぽり収まる巨大な星形の中心に、鶴ノ森がある。

「そうだ。日々生まれる都人の邪気を霊石と五芒星の力で一点に集中させることで、怨を作り出す仕掛けだ。されば関白に願ひ出て、術を施し、紫水晶を取り除いた。石陣を崩してから、鶴ノ森の怨が少し弱くなったはずだが、まだまだ強い」

「なぜだ、広賢？」

広賢が胸に架かる丁字の祭具へ手をやった。

「平安京は調べ尽くしたが、おそらく五芒星は他にもあるのだ。決戦までに、その場所を見定めて崩さねば、鶴ノ森の邪気は断てまい。ゆえに身どもはこれから旅に出る。三月の初め、桜が咲く頃には、戻って参る」

「わしは奥出雲^{おくいずも}に籠って武者修行じゃ。しばらく会えんな」

「私は決戦までに、いがみ合う連中をできるだけまとめよう」

頼政は心持ち声を落とした。

「御子、頼みがある。螢火を捜してほしいんじゃ」

「例の女官か。承知している」

螢火はどこにいるのだ？ 布留部に捕われているのか。

(必ず助け出してやるぞ、螢火)

今の頼政にできることは、鶴を倒す武術をひたすら磨くことだけだ。

皆で神楽殿を出た。吐く息が白い。

夜明けの近づく真冬の京の町はしんと冷えて、綿雪が降り止む気配もなかった。

(つづく)